

京都府精華町広報誌「華創」

2022年4月

2024年3月

手話でコミュニケーション第71回 ～ 手話でコミュニケーション第94回

掲 載 コ ラ ム

2016年6月から精華町広報誌に掲載している「手話でコミュニケーション」では、すべての聴覚障害のある方が手話を使うわけではありませんが、意思疎通の方法の一つとして手話を紹介しています。2022年4月から2024年3月には、手話と一緒に聴覚障害がある方の体験や日頃感じていることなど、聴覚障害について多くの方に知ってもらいたいことを、関係団体の皆さんがさまざまなテーマで発信しました。

今回、24回発信したコラムをまとめました。

聴覚障害について、理解へのきっかけになることを願っています。



精華町健康福祉環境部社会福祉課（2024年3月）

2022年4月(手話でコミュニケーション第71回)

知っていますか？

「聞こえにくい」こと「聞こえない」こと

手話は、言語の一つであり、コミュニケーション手段の一つです。その人が用いるコミュニケーション手段を理解し、尊重することが大切です。聞こえない方には一人ひとり個人差があり、困る事はそれぞれによって異なります。例えば、低い音だけが聞こえなかったり、ことばが違うことばに聞こえたり、生まれたときから聞こえなかったり、人生の途中で聞こえにくくなったり、聴覚障害の原因や程度の差、聞こえ方の違いはさまざまです。個々の状況に合わせたコミュニケーションについては、次号でお伝えします。



2022年5月(手話でコミュニケーション第72回)

知っていますか？

「聞こえにくい」こと「聞こえない」こと

～一人ひとりに合ったコミュニケーション～

聴覚障害の状況は個人差があり、外見ではわかりにくいことも特徴です。コミュニケーション方法は、手話・筆談・口話・聴覚活用などさまざまです。話す相手や場面によって、複数の手段を組み合わせたり、使い分けたりしています。どの手段を使うかは本人に確認するとよいでしょう。

聴覚障害がある方の中には、小さな声でも大きな声でも聞こえにくい方がいます。これは「補充現象」と言い、一定以上の音の強さになると実際より大きく感じてしまう症状です。突然、耳元で大きな声で話すことはせず、本人が望むコミュニケーション方法を確認するようにしましょう。



2022年6月(手話でコミュニケーション第73回)

ろう者*の困り事

ろう者は視覚に頼って生活しているので「音」に関して不便なことがいっぱいあります。声だけで話しかけられたり挨拶されたとき気付かないことがあり、周りから無視していると誤解されてしまうこともあります。自転車のベルや車のクラクションに気付かずそのまま歩いていることも。家電のエラーも(冷蔵庫の半ドアなど)音がほとんどなので気付かないことが多いです。一番困るのはコミュニケーション。ゆっくり、はっきり話してもらえると口の形を読み取ることができるけど今はほとんどの人がマスクをしているので全く分かりません。ろう者としては手話でお話しできるのが一番うれしいです。皆さん、手話をやってみませんか？
※ろう者は手話を言語とし、視覚で内容や言葉を理解します。



2022年7月(手話でコミュニケーション第74回)

手話の成り立ち

手話は物の形や動きや漢字の形などのイメージで表現され、手の動きだけではなく顔の表情や顔の動き(視線・眉の上げ下げ・首の角度・口の形など)や上半身の動きも大事です。手話は「見る言葉」です。筆談や口の形を読み取るのは限界があります。筆談は時間がかかり、言いたい事が100%伝えられません。口の形を読み取るのは口の形が似た言葉だと読み間違えが多く、また読み取るのに集中してしまっていて疲れます。でも手話だとすぐ内容が分かります。私たちろう者は聞こえる皆さんと手話でいろいろおしゃべりしたいです。



ちゅうとっしやう なんちやうしゃ 中途失聴・難聴者のきこえの「見える化」

あ か?た? ぎ?じ?

あした し?ひ? き?ち?

あした しちじ??? 明日 7時

ちゅうとっしやう なんちやうしゃ こま ごと 中途失聴・難聴者の困り事

ちゅうとっしやう なんちやうしゃ おと き と 中途失聴・難聴者は、「音として聞こえるけど聞き取れない」とよく言います。

これは、言葉がひずんで聞こえるためです。こうした状況の中、私たちは「残存する聴覚」と「視覚情報」を合わせて活用するトータルコミュニケーションで生活をしています。昨今のコロナ禍によるマスク着用により、話し手の言葉がこもり、唇の動きや表情から話の内容を読み取ることができず、周りのコミュニケーションや情報から取り残されてしまいがちです。より「視覚情報」が活用できる手話や筆談は有効なコミュニケーション方法です。

「^{もじ}文字」による^{しえん あんしん つな}支援が安心して繋がる

国内の^{こくない}難聴^{なんちやうじかくしや}自覚者は1400万人以上。実に^{まんにんいじやう}総人口^{じつ そうじんこう}の1割以上^{わりいじやう}も^{もう}数字^{すうじ}であり、「^{じまく}字幕」は^{こくみん}国民的課題^{こくみん けぎ}ともいわれます。最近^{さいきん}、テレビ^{てれび}のCMでも「^{じまく}字幕」を見かけることが多くなりましたね。^{ほちやうき}補聴器・^{じんこうないじ}人工内耳^{じんこうないじ}の^{そうぐ}装具^{ざんぞん}による「^{ざんぞん}残存する聴覚^{ちやうかく}の活用^{かつよう}」は^{きこ}聞き漏らし^{き まちが}・^{ふあんてい}聞き間違い^{ふあんてい}があり不安定な^{じやうきやう}状況^{じやうきやう}ですが、そこに「^{もじ}文字」という「^{しやくじやうほう}視覚情報^{しやくじやうほう}」が^{くわ}加わることで、とても^{あんしん}安心^{あんしん}につながります。実際のコミュニケーション時は、^{じつさい}前もって準備^{まえ}ができる「^{じまく}字幕」とは^べ異なり^べ、その^ば場で「^{しやくじ}文字」にする^{ひつようせい}必要性^{ひつようせい}があり、「^{はや}速く^{ただ}、正しく^{よみ}、読みやすく^し」^{えん}支援^{えん}していただけることでコミュニケーションの^{はば}幅^{ひろ}が広がります。



あんしん ぐ
安心して暮らすために
だれ
～誰もが～

にちじょうせいかつ しゃいかいかつどう じゅうじつ しょうがい とくせい
日常生活や社会活動の充実のため、障害の特性
おう ちようかくしやうがい ひと
に応じた支援があります。聴覚障害がある人にとっての要約筆記
しやわつうやく ひと やくしやう てつづ あと りやう
や手話通訳もその一つです。役所などで手続きをした後で利用が
しえん こうきやうこうつうきかん う しえん だれ
できる支援や公共交通機関で受けられる支援などがあります。誰
たいせつ しえん こま ひと こえ
もができる大切な支援は、困っている人に声をかけることです。
しょうがい う おい ねんれい かんけい こま ひと しぜん こえ
障害の有無や年齢に関係なく、困っている人がいれば自然に声を
かけられる人でありたいものです。声をかける時、聴覚障害があ
ひと うし よこ こえ きづ しょうめん こえ
る人だと後ろや横からの声には気づきにくいので、正面から声を
かけましょう。そして、どのような方法でコミュニケーションを
ほうほう
とればよいかを本人に尋ねましょう。



「もしかしてきこえないのかな？」
 という方を見かけたら

皆さんはきこえない方に出会ったことはありますか？
 例えば病院や銀行で繰り返し呼ばれているのに返事がない場合、
 ひょっとしたらきこえない方かもしれません。最近では呼び出し番号
 がディスプレイに出たり、バイブで知らせてくれる機械もあり便利に
 なりました。では電車が突然止まった場合はどうしますか？アナウ
 ンスを聞きますね。きこえない方を感じている方はきこえなかったり
 不明瞭なために状況が分からず不安な時間を過ごしています。ご自
 身が落ち着いてからでよいので周りを見渡してみてください。困った
 顔でキョロキョロしている方を見かけたら、声をかけてみてください。



2022年12月(手話でコミュニケーション第79回)

子どもたちへ、広がれ「理解の輪」

手話サークルでは福祉体験学習の一環として市内の小・中学校へ外向き手話体験学習をしています。最近では手話を目にする機会が増え手話だけが注目されがちですが、子どもたちには手話だけを学ぶのではなく、実際に町内に住む聴覚言語障害者から「聞こえない・聞こえにくいとはどういうことか? 困っていることは?」などの話を聞いて考えてもらうことも大切に行っています。体験学習を通じて「理解の輪」が広がることも願っています。将来、子どもたちが進学や就職で聴覚言語障害者と接することがあるかもしれません。そのときにこの体験学習のことを思い出してもらえたらと思っています。



2023年1月(手話でコミュニケーション第80回)

聴覚障害の有無にかかわらず暮らしやすい地域を目指して

手話サークルでは手話の会話学習をするだけでなく、聴覚障害のある皆さんとの交流を大切にしています。交流を通して、聞こえないことの不便や不自由を知ることができます。聞こえることを前提とした社会には、たくさんの不便や不自由があります。邦画の字幕上映は限られており、映画鑑賞をあきらめる方もいます。急な病気やけがの時、手話通訳者がいなければ、正しい意思疎通ができません。聴覚障害への理解が広まることで、誰もが暮らしやすい地域となることを願っています。



2023年2月(手話でコミュニケーション第81回)

文字でつなぐ架け橋・「要約筆記」

要約筆記ってご存知ですか? 聴覚障害者の日常生活や社会参加を支援する方法の1つで、「話し言葉」を文字にして手書きやパソコンで伝えられます。要約筆記を必要とする聴覚障害者の多くは、音声言語を獲得した後、中途失聴・難聴者にとっても慣れ親しんでいるので安心につながります。では筆談と要約筆記はどう違うのでしょうか? 筆談は話をする当事者同士が文字を書いて伝え合います。要約筆記は誰もが等しく情報を得られ、コミュニケーションできるよう「伝えたい人」と「知りたい人」を文字でつなぐ架け橋です。



2023年3月(手話でコミュニケーション第82回)

安心につながる文字情報

電車内では文字情報がディスプレイに表示され、テレビや一部のCM、動画配信にも字幕が付くようになりました。一番身近なスマートフォンでは外出先でも簡単に文字情報が得られます。音声入力アプリを使えば声も簡単に文字になり、以前に比べると中途失聴・難聴者が暮らしやすい社会になってきているのではと感じます。ですが、どこでもそのようなサービスが使える訳ではなく、また誰もが使えるわけでもありません。聞こえにくい方を見かけたら、「何かお手伝いできることがありますか」と文字に書いて話しかけてみてください。あなたの小さなサポートが大きな安心につながります。



2023 年 4 月 (手話でコミュニケーション第 83 回)

ろう者のこもりごと 2

聴覚障害は他の障害と違って外見だけでは障害があると気付かれません。日常生活を送る中で特に不便を感じることの1つが買い物や飲食店のやりとりです。コロナ前のマックスなしの時でも注文間違いや意思疎通のずれがあり、今はマスクによってさらに不便になっています。その時はマスクをとって大きくゆっくり話す、身ぶりであらわす、筆談する、イラストや写真を指さす「指さしシート」を活用するなどの対応をしていただけなら助かります。手話を見て、手話でやりとりできるようになれば、スムーズな意思疎通が可能になり私たちも助かります。5月から手話教室が始まりますので興味のある方はぜひ参加してください(詳しくは本誌27ページ)。



2023 年 5 月 (手話でコミュニケーション第 84 回)

手話いま・むかし

テレビドラマで手話が話題になり、社会的にも認知度が高くなっていますが、昔は手話を使うと周囲から白い目で見られていました。また、聾学校で手話を使うことが厳しく禁じられていた時代があったのです。聞こえる人が多い社会では手話は役に立たない、それより聞こえる人と同じように声を出し、相手の口を読み取ることが大事とされていました。その方法では十分なコミュニケーションを取るのが難しく、あるろう者は友達と手話でおしゃべりしているところを先生に見つかり、手を叩かれたそうです。今となっては信じられない話ですね。手話が増えていけると、ろう者は日常生活で情報を得やすくなり安心です。

2023 年 6 月 (手話でコミュニケーション第 85 回)

手話を学ぼう

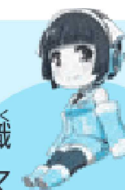
最近、手話やろう者が登場する映画やドラマを見かけることが増えてきました。それをきっかけに手話に興味を持つ方もいると思います。手話は生活の中から生まれてきた言葉です。私たちの言葉に方言があるように手話にも方言があります。手話の表現は1種類だけではありません。手話の成り立ちや背景にあるろう者の歴史や生活を学ぶことで手話の魅力を知ることができます。精華町には2つの手話サークルがあります。言語としての手話を学び、ろう者との交流を通して聴覚障害の理解を深め、誰もが豊かに暮らせる地域社会を目指しましょう。



2023 年 7 月 (手話でコミュニケーション第 86 回)

誰も取り残さない町を目指して

家族や職場に聴覚障害者がいる。子育てが終わった、退職したので何かを始めたい。聴覚障害者が主人公のTVドラマで手話に興味を持った。聞こえに不自由を感じてきたから。手話を学びたいと思うきっかけは人それぞれです。サークルや手話教室には立場の違う人々が集います。手話は表情豊かな言語です。手話に魅了され、伝えることの喜びを感じると同時に、聴覚障害者の暮らしや、社会で置かれている状況を知ることとなります。自分たちが住む町の状況は？障害のある人が住みやすく考えようになります。手話をきっかけに「誰ひとり取り残さない町・精華町」になることを願っています。



2023 年 8 月 (手話でコミュニケーション第 87 回)

聞こえにくくなるということ ～コミュニケーション障害～

聞こえにくくなっていくというのは、どういった世界でしょうか？ヘレン・ケラーが、哲学者カントの言葉を引用して「視覚障害は人とモノをつながりにくくさせる。一方、聴覚障害は人と人をつながりにくくさせる」と言い残されたのは有名です。聴力が低下すると、周りの方とのコミュニケーションを避けてしまう。周りの方もコミュニケーションを取ってこなくなる。ここからくる孤独感や疎外感が大きくなり、家に引きこもりがちになる。いわゆる「ひとりぼっちの世界」です。その方にも「大丈夫！コミュニケーション方法は音声以外にもあるよ」と言える社会を自指したいものです。



2023 年 9 月 (手話でコミュニケーション第 88 回)

聞こえにくくなるということ ～情報障害～

現在社会はさまざまな情報が溢れています。その情報を自や耳から取り入れ、私たちは判断し、行動に移しています。聴覚が、自らの行動に対する意思決定に重要な役割を果たしているということが分かりますよね。聞こえにくくなると、音としては入ってくるのですが、その内容が分からないという状況になってきます。行動を起こすための判断、判断をするための情報を得るという、根本的な部分ができないということです。仕事の情報が得られない、自分の命を守るための情報も得られない。音声情報を見える情報として得て、聴覚障害者がいきいきと暮らせる社会を自指したいものです。



2023 年 10 月 (手話でコミュニケーション第 89 回)

中途失聴者・難聴者にとっての手話

このコーナーで紹介している「手話」。中途失聴者・難聴者にとっても、大切なコミュニケーション方法のひとつです。聞こえにくいために生じるコミュニケーション障害・情報障害で、こころがついていかずふさぎ込む方が多くいます。立ち直す過程で「手話」という言語に出会い、世界が明るくなったと笑顔で答えられます。不安定となってしまった聴覚情報に「手話」という視覚情報を得て、これからの人生に希望がとまった訳です。「手話」を第一言語として使われるろう者に敬意を表するとともに、この「手話」という言語が、より社会に広まっていくことに期待したいと思います。



2023 年 11 月 (手話でコミュニケーション第 90 回)

活用してみよう！要約筆記

要約筆記は「話し言葉」を文字にして聴覚障害者に伝えます。

「ノートテイク」：対象者は2人までで要約筆記者2人が交互に紙に書いて伝えます。紙とペンがあれば行えるため、病院での診察(要約筆記者1名)、会議、地域のサロンなど、多くの場面で使われます。

「全体投影」：対象者が3人以上の場合は OHC (手書き)・パソコンなどの機器を使用しスクリーンに投影する方法です。全員同時に同じ文字情報を見ることができ、講演会や聴覚障害者団体の会議で使われます。

高齢になって聞こえに不自由を感じる方が増加傾向の今、日ごろ慣れ親しんでいる文字で伝える要約筆記は有効な情報保障です。



2023 年 12 月 (手話でコミュニケーション第 91 回)

「聞こえの共生社会」への第一歩

聞こえない方も聞こえにくい方も、お話が大好き。中途失聴・難聴者は、聞こえが不安定なので、視覚情報と合わせてコミュニケーションされている方が多いです。お手元を書く物があれば、文字で書いていただく。お手元を書く物がなければ、身振りでも、空書きでも大丈夫。伝えることは音声以外でもできるもの。まずはお話したいというところを持っていただければうれしいです。「ここるところ、通じ合いたい」という気持ちをお互いが持てば通じ合え、そこから社会が生まれるということになるのだと思います。



2024 年 1 月 (手話でコミュニケーション第 92 回)

「聞こえの共生社会」への第一歩 その 2

聴覚障害のある方とお話する時にあなたならどうしますか？コミュニケーションの取り方は、手話・筆談・口話・身ぶり手ぶり・インターネットの利用などさまざまです。「私は手話が分からないから」といって話しかけるのをためらわないで、目と目が合ったら笑顔であいさつ。筆談や空書き、口話、スマホの機能を使ったり身ぶり手ぶりなど自分にできるコミュニケーションの方法を工夫して気持ちを伝えてみてはどうでしょうか。一番大切なことは「伝えたい」「分かってほしい」という気持ちです。少しぎこちないほほ笑みからでもきっと温かい心の触れ合いが始まるはずです。



2024 年 2 月 (手話でコミュニケーション第 93 回)

「聞こえの共生社会」への第一歩 その 3

昔、手話は「みっともないもの」と避けられていましたが、私たちちろう者にとって手話は大切な言葉です。今では聴者も手話を覚える人が増えてきて、少しずつ聞こえる聞こえないに関係なく会話ができるようになりました。文字変換アプリを使ったり、テレビは字幕を付けて見たりと、視覚的に情報をキャッチすることができるようになりました。しかし、まだまだ壁があります。これらの壁を壊すには私たちだけの力では足りません。聴者の力も必要です。お互いを理解し、支え合ってこそ共生社会につながっていくのではないのでしょうか。



2024 年 3 月 (手話でコミュニケーション第 94 回)

「聞こえの共生社会」への第一歩 その 4

まちの中で聴覚障害のある方が困る事ってなんでしょう。「自動車のクラクションが聞こえない」「電車内の車内放送がわからない」「災害時では状況判断がしにくい」など、ほかにもたくさんあります。そうした時に、周りの様子をうかがい、不安そうにしている人に気づいたら、その人にわかるように優しく肩に手を添える、手を振るなどの合図を送りましょう。その時々にあったコミュニケーションの方法で情報のやり取りをしましょう。緊急時には、手を取りあって一緒に行動しましょう。「伝えたい・わかってほしい」気持ちが大切です。協力することが、人と人のつながりを生み出し共生社会の第一歩となります。

